

2 新学習指導要領と「指導なき評価」

司会（編集K） ここまでで各学校段階のコロナ禍における授業の様子や現在の授業の様子をご報告いただきました。関連したご質問やご意見があればうかがいたいのですが、いかがでしょう。

元中D コロナ禍とは別のことですが、ちょうどこの時期に中学校では新しい学習指導要領が施行されて、教科書が難しくなって、現場で教科書をこなしきれんだろうかと心配しているという話を聞きます。コロナ禍とあいまって中学校の生徒も先生も大変ではないかと思っているのですが、その点についてはどうでしょう。教科書はどの程度難しくなっているのですか。

現中H 小学校高学年で英語が教科化したのに伴って、言語材料の配当が前倒しになり、従来は高等学校の学習事項だった仮定法などが中学校に降りてきました。学習する語彙数も増えています。学習語彙は小学校が実質200語程度（注：小学校は教科ではなく英語活動なので語数の指定がない。）だったのが600語～700語になり、中学校ではこれまで1,200語だったのが1,600語～1,800語になりました。高校は1,800語だったのが、現在は1,800語～2,500語になりました。合計で3,000語だったのが、4,000語～5,000語になりました。教科書の1つのパートに出てくる新出単語の数が多過ぎて、こなしきれないといった感じです。いま中学2年の担当ですが、リーディングの教材は昔の3年生の内容ですね。だからどうしても消化不良になってしまう。これには授業のやり方も関係していると思います。言語活動中心の授業ということで、最近あまり教科書を丁寧に扱わない傾向があります。音読練習をしないので、教科書が読めない生徒が非常に多い。授業の中で音読練習をするのはせいぜい2,3回でしょう。それなのに音読のテストはするんです。テストをするから家で練習してくるよと言っているのですが、できる子は一生懸命練習するけれど、できない子はしない。だからできる子とできない子の格差がますます開いてしまいます。

現高S コロナ禍でリモート授業になってから子どもたちが自主的に学ぶことが大前提になっているような気がします。どのように学習していくかという指導がなく、子どもの自主性に丸投げといった感じがします。学校に来て学ぶことの意味とか教師の意味というものをしっかり考えないといけないのではないのでしょうか。そうでないとコンピュータが教師になるといった近未来小説のようになりそうで、今が正念場ではないかという危機感を持ちます。

大学K 中学校の現場の様子を見ていると、2021年に新指導要領が施行されて「主体的に学びに向かう姿勢」が評価項目になっているけれど、主体的に学びに向かう姿勢をつくるための指導というものが無い。もともとそういう

姿勢を持っているかどうかを評価するだけになっているのではないか。「指導なき評価」ということですね。コロナ禍によってそれが如実になったということではないでしょうか。主体的な学習態度という、決められた提出物をきちんと提出したかどうかといった問題になってしまうこともあります。例えばこんな話があります。ある中学生がテストで満点をとった。そのとき「振り返りコーナー」というのがあって、「テストを振り返って反省点を書け」とある。満点なので反省点はないと思ったその生徒は何も書かなかった。そうすると主体的に学習する態度が劣っていると評価されてしまった。そんな話を聞くと、どうも本末転倒ではないかと思えますね。コロナ禍にかかわらず、評価はどうあるべきか、評価の前に指導があるべきではないかということが問題で、それがコロナ禍によって露わになってきたと思えます。

元中D 大学K先生が例に挙げたような話は特別な例ではないと思えますね。「がんばったけれど評価は全部Cだった」とか、「どうがんばっていいのかわからない」という生徒の声をよく聞きます。「主体性」と言うときれいな言葉ですが、要するに自己責任論ではないか。「できる・できないは自分の責任だ」という考え方がまかり通っているような気がします。大人の世界では仕方ないかもしれないけれど、子どもや若者はそれでは気の毒ではないかと思えます。

現高S コロンビア大学出身で、1998年から2008年までエール大学で英語を教えていたWilliam Deresiewicz氏の著書 *Excellent Sheep* に「アメリカの子どもたちは、学ぶということは、まず『宿題をすること』、『答えを見つけること』、そして『テストで満点を取ること』だと教えられる。自分で考えることを教えられることはない。エール大学の学生は自分の頭で考える。しかし、それは教師がそれを望むからであって、教師の望みに応えるという受け身の姿勢であることは変わらない」という下りがあります。今の教育は「主体的に」と言っているけれど、現実には、主体的な学びを阻止するように動いているように思えてなりません。リモート授業になって次々に教師が課題をだす。主体的な学びとは言えないのではないのでしょうか。生徒も自分で課題を精査する、これは時間の無駄だと思えば、そんな課題はやらない、というくらいの気概を持ってほしいと思えます。

司会（編集K） それはまた大胆ですね。

現高S 課題を提出しないことで教師からマイナスの評価をされるかもしれないけれど、教師が望むことに応じているばかりでは、いつまでも受け身の姿勢のsheepのままになっているになってしまう。そこから変えていく必要があると伝えていきたいと思っています。

現高F 文科省も、主体的で、対話的で、深い学びということを行っています
が、具体的にどのようなことなのか本当に理解して授業している教師は少な
いのではないのでしょうか。

大学K 定義があいまいなまま、主体性が評価の対象になっているので、子ど
もに不利益をもたらしているのが大きな問題だと思います。

現高S 評価について最近疑問に思うのは、なぜみんな「振り返り」「振り返
り」と言うのかということなんです。

現中H 新指導要領に準拠した新しい教科書には各単元の最後に「振り返り
コーナー」がありますね。単元の初めに「こんなことができるようになる
う」というCAN-DOの考え方を踏まえた呼びかけがあり、単元末に「どの程
度できるようになったか」を振り返るコーナーがあるというスタイルになっ
ています。

現高S でも、人はそれほど自分のことを振り返りながら日々生きているわけ
ではありませんよね。

現中H 確かに、おっしゃる通りですね。

現高S いたるところで振り返ることを求められると、自分が「できない」と
いうマイナス面ばかり意識してしまい、自尊心が持てなくなるのではないで
しょうか。

大学K できない子は「できない」という悪いイメージしか持てないようにな
ってしまいますね。振り返りがうまく行くという大前提で物事を考えてい
るけれど、振り返ることで気づきがあってそれを次の学習に生かせるという
よいサイクルになっている子どもがどれほどいるのでしょうか。振り返って
「気づいたことを書け」と言われても、なかなか書けないと思います。もっ
とゆったりと、漠然と「おもしろかった」程度でよいことにしないと、常に
「書け」「書け」と言われては、追い詰められたような気持ちになってしまう
のではないのでしょうか。

元中D もともと観点別評価は、点数が取れない子どもにも点数とは違った
観点を設けて、よいところを見つけて評価してやろうという発想で始まった
ものなのです。それなのに、成績が1であるうえに全ての観点がCといった評
価をすることがある。1であることだけでつらいのに、全ての観点がCだと言
われると生きていくのが嫌になってしまいますよ。